



【旭イノベックス会社概要】

- ・設立: 昭和27年5月
- ・資本金: 1億7,820万円
- ・従業員数: 210名
- ・本社所在地: 札幌市清田区平岡9条1丁目1番6号
- ・工場: 北広島工場、石狩工場、石狩第二工場、栗山工場

【事業内容】

- ・橋梁、水門、水道橋など各種鋼構造物の設計・製造・施工・鉄骨工事、鋼構造物設計・施工
- ・パネルヒーターなど暖房機の製造・販売

会員企業トップインタビュー第2回目の今回は、北海道では数少ない地場の物づくり企業であり、先ごろ見事、第5回「ものづくり日本大賞」内閣総理大臣賞を受賞されるという快挙を成し遂げられた旭イノベックス株式会社の星野社長にお話を伺いました。

■ 「ものづくり日本大賞」の受賞について

Q. このたびは『洪水から人を守る無動力自動開閉樋門ゲート（オートゲート）の開発』が、第5回「ものづくり日本大賞」内閣総理大臣賞を受賞され、おめでとうございます。北海道の企業としては2社目となる快挙ですね。

A. ありがとうございます。水門、橋梁などの土木構造物や建築用鉄骨、暖房機などの地場製造メーカーとして技術開発力では全国どこにも負けない自信はありましたが、一般的な知名度が低い当社にとって今回の受賞は当社従業員に大きな自信と誇りを与えていただきました。

Q. 開発に至った経緯をお聞かせください。

A. 『樋門』は河川から農業用水等を取水・排水するための水門の一種で、河川との水位差の高低に応じて扉ゲートを開閉調整し、河川堤防の住宅地・農地側を洪水から守る施設です。ゲートの開閉は、一部大規模な施設では油圧式や電動で河川事務所から遠隔操作するものもありますが、大部分は樋門操作人が現場で手で操作するものです。樋門操作人には農家の方が多いのですが、北海道開発局より高齢化・人手不足を解消するために樋門の自動開閉化の開発を依頼されたのが始まりです。

その後、実験水槽での試行を経て製品化したのは17年前の平成9年ですが、その後、各設置現場での開閉精度の検証に時間を要し信頼性の確認がなされ、広く採用されるようになった段階での受賞となった訳です。

Q. 樋門開閉の自動化にあたってのポイントは何か。

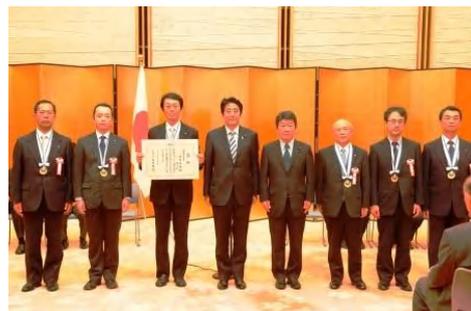
A. 扉（ゲート）が水流と内外水位差を受けて、下方モーメントとしての『バランスウエイト』と上方モーメントとしての『フロント』の働きによってシーソーのように

動作することで自動的に開閉する仕組みです。水の力を使って水を制御する、まさに自然の力のみを使った環境にやさしい無動力の装置であり原理は非常にシンプルです。ある方が「これは相手の力を使ってぶんなげる柔の技術だ」とおっしゃいましたが、まさに言い得て妙です。

そして、開発にあたって最も腐心した点は、微妙な内外水位差を感知していかなる状態においても間違いなく自動開閉させる、まさにこの一点でした。

Q. 受賞理由に「東日本大震災において消防団員等の尊い人命が奪われたことで価値が再認識された、世界に問うべき日本の防災技術」とありますが。

A. 元々の開発の契機は、操作人の高齢化対策としての自動化でしたが、その後ゲリラ豪雨が頻発するようになって操作人の転落事故が相次いだことから、人命対策という面がクローズアップされてきました。そして東日本大震災の際には、津波遡上時のゲート自動閉止により逆流防止効果が実証され、さらに注目を集めることとなりました。なお、このオートゲートは門柱レスによる景観配慮、建設費の30～40%軽減や維持管理費削減等によるコスト縮減など、マルチなメリットを有しています。



ものづくり大賞授賞式（安倍首相と記念撮影）

Q. オートゲートは全国でどの程度普及していますか。

A. 現在は800箇所程度です。全国には大小合わせて10万箇所以上の樋門があるはずですから、未だ普及率は1%にも達していないと思います。本技術の特許をもっているのは私どもだけであり、唯一のメーカーとして全国7事業拠点（札幌、仙台、新潟、東京、名古屋、大阪、福岡）で、国交省をはじめとする発注官庁に対し、普及営業に努めているところです。



オートゲート施工例

### ■沿革、入社の動機など

Q. 御社の沿革についてお聞かせください。

A. ゴム長靴メーカーの機械設計技師であった父親が、昭和27年に独立して旭鉄工所を創業、最初は機械の設計・製造の『何でも屋』であったのが、大阪の栗本鐵工所の協力会社（下請け）として、現在の主力製品である水門の設計・製造を昭和36年にスタートしました。その後、暖房機、橋梁、建築用鉄骨など順次業容を拡大、昭和49年頃にはほぼ現在の事業ラインナップが出揃っていました。

現在の旭イノベックス(株)は、平成19年に旧旭グループの旭鉄工所（現在の土木鉄構事業部）、旭製作所（現在の建築鉄構事業部）、旭イノベックス（現在の住環機器事業部）が統合してできた会社です。

Q. 星野社長の入社のお動機やその後のエピソードなどをお聞かせください。

A. 慶応大学経済学部を卒業後、トヨタ自動車工業に入社し、海外輸出部門に配属されました。当時いつ潰れるか分からない零細企業を継ぐ気は全くなかったのですが父親が癌になって倒れたのを機に、トヨタは1年余りで辞め、急遽方向転換してこの会社に入社しました。いきなり取締役からスタートしましたが、オイルショック後は経営状態が厳しくなり、先ず第一に取り組んだことが脱下請けでした。私は技術屋ではないので技術の分野には口を出しませんでした。とにかく、自主技術を自主営業で売り込む、直接お客様の所へ行って要望を聞いて納品する、これを徹底して行いました。そうすることである程度収益が見込めるようになりました。下請けのままでは創意工夫のモチベーションもプライドも生まれませんからね。

### ■経営理念について

Q. 会社案内を拝見しますと、御社の社是は、1. 「長期的安定」、2. 「人材の育成」、3. 「社会との調和」

となっておりますが、社長のお考えをお聞かせください。

A. 世の中には会社の急成長を望む経営者もおられ、それはそれで立派ですが、社員にとってそれが本当に幸せなのか。会社で仕事を一生懸命にやって家に帰れば一市民ですし、家の中ではお父さん・お母さんであり、息子・娘であり、家族がいるわけです。給料をいくらたくさん貰っても使う暇もない状況は豊かではありません。給料はほどほどに貰って、家庭にちゃんと関って、趣味も追及できる、そのためには会社の「長期的安定」が必須条件です。

そして、会社が長期的に成長していくために欠かせないのが「人材育成」です。従業員の教育研修においては、視野狭窄にならないよう、少し自分の仕事を離れて客観的に見つめ直す機会となることを意識しています。北海道生産性本部さんの洋上大学研修への参加もその一環です。

また、当社は道外にも営業所を展開していますので、道内で井の中の蛙にならないよう、人材をどんどん交替で道外へ行かせています。

最後に「社会との調和」ですが、会社というのは世の中の一部であり隔離されている訳ではない、ということです。世の中で今何が一番大切なのかを常に意識して製品開発を行っていくこと、コンプライアンスは当たり前のことです。特に私ども社会基盤を築く事業に求められるものは、地域の人々の利便性の向上と快適な生活実現のために、絶えず技術・製品の革新を図っていくことであります。

Q. 御社の「旭イノベックス」という社名にはどのような思いが込められているのでしょうか。

A. 「イノベックス」はイノベーションからきています。今までよりも少しでもいい仕事をするために創意工夫することがイノベーションだと思っています。何も技術・製品開発のみに限らず、経理や総務でも同じです。不断に改革・改善を心掛ける。今までのやり方がベストだと思った瞬間に成長発展はありません。去年行ったことを今年も繰り返す、それでは仕事が面白くない。仕事を面白くするには変える事、チャレンジして駄目だったら元に戻せばいいだけ、と言い続けています。但し、北海道の人は非常に慎重で、うるさく言ってようやく動くようなところがありますから、実際には失敗はあまりないですけどね。

Q. 最後に、今後御社が目指すもの、将来展望についてお聞かせください。

A. オートゲートに続き、画期的な製品を開発中ですが、これは企業秘密です（笑い）。当社は社会基盤整備という分野でエクセレントカンパニーを目指していきますが、公共事業においては、国にも道にも市にもお金がありません。従って、技術・製品開発のキーワードはコスト削減です。それは製品のコスト削減のみならず、工期短縮、工事費や維持管理費の削減も含めたトータルでのコスト削減です。